

はじめに

脳卒中の患者さんから聞かれました...

「今後、私はリハビリを行えば、一人で歩けるようになりますか？」

「この手は動くようになりますか？」

これら、機能的予後に関する質問を、セラピストは日常的によく受けると思われるが、実際には、そのような調査・研究は十分ではない。



目的

- PTは、日常の臨床現場において、脳卒中後遺症者からの機能予後に関する質問を、どのくらい経験しているのか？
- その経験の頻度は、質問者（患者）の発症からの期間（急性期，回復期，維持期）によって、違いがあるのか？
- 質問への返答の際、どのような困難を感じているか？

→その現状を把握すること

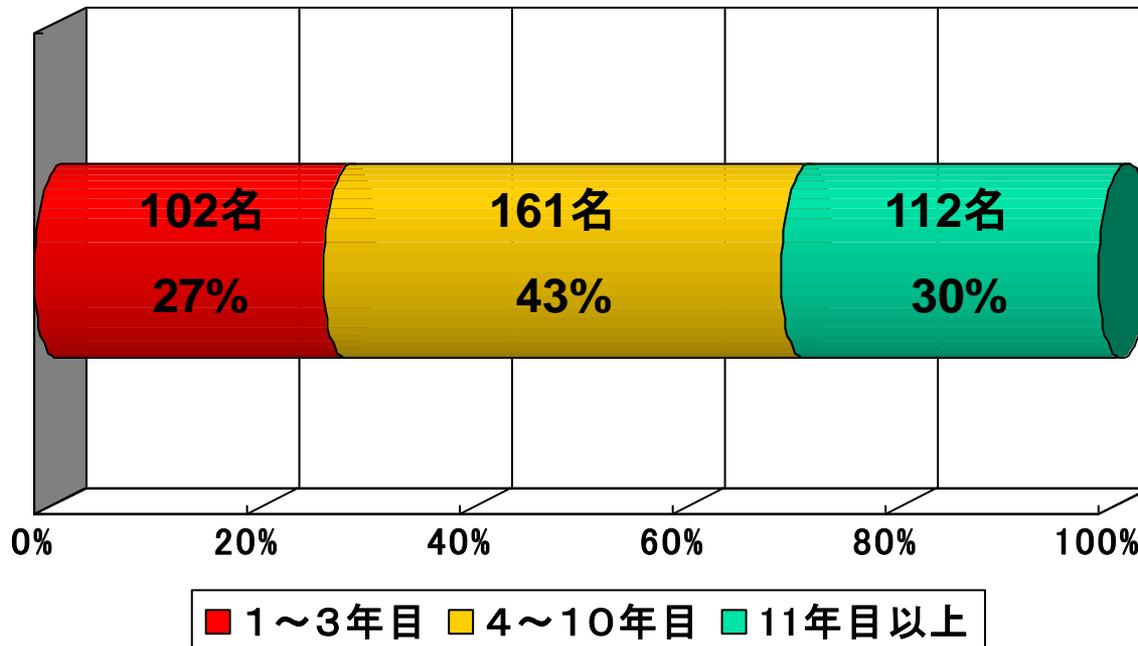


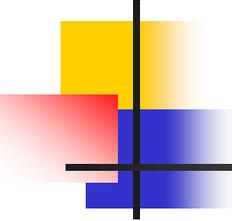
方法

- 新潟県内のPTを対象として,
- 質問紙法, 郵送によるアンケート調査を行った.

回答者の属性-1

- 有効回答者数 375名





脳卒中発症からの期間によって、質問の頻度は増えるのか、減るのか？

- 急性期

 - = 発症から概ね1ヶ月以内のケース

- 回復期

 - = 1ヶ月以上12ヶ月以内のケース

- 維持期

 - = 12ヶ月以上のケース



属性-2: 経験年数と勤務経験

※ 回答者の多くが複数の職場での勤務経験があるため、実人数(375名)と、延べ人数(924名)が異なる。

	急性期	回復期	維持期	計
1～3年目	52	77	79	208
4～10年目	129	140	145	414
11年目～	104	101	97	302
計	285	318	321	924



今回の調査方法の限界－1

- 質問経験の有無を、回答者(PT)の主観に基づいて答えてもらったため、実際に質問を受けた頻度とは、厳密には異なる可能性がある。

例えば...

経験年数2年のPT, A子さんは、昨年の1年間に聞かれた件数が実際には3件だったが、そのたび、患者さんへの返答に非常に苦慮したために、そのときの印象が非常に強く残り、「よく経験する」と答えたかもしれない。



今回の調査方法の限界ー2

- データ(選択肢)を順位尺度としたため、厳密な統計処理が困難.

今回の結果は、あくまで「傾向」

考察も、「PTが質問を受けた頻度」=「患者さんが実際に質問を行った頻度」と仮定してのもの

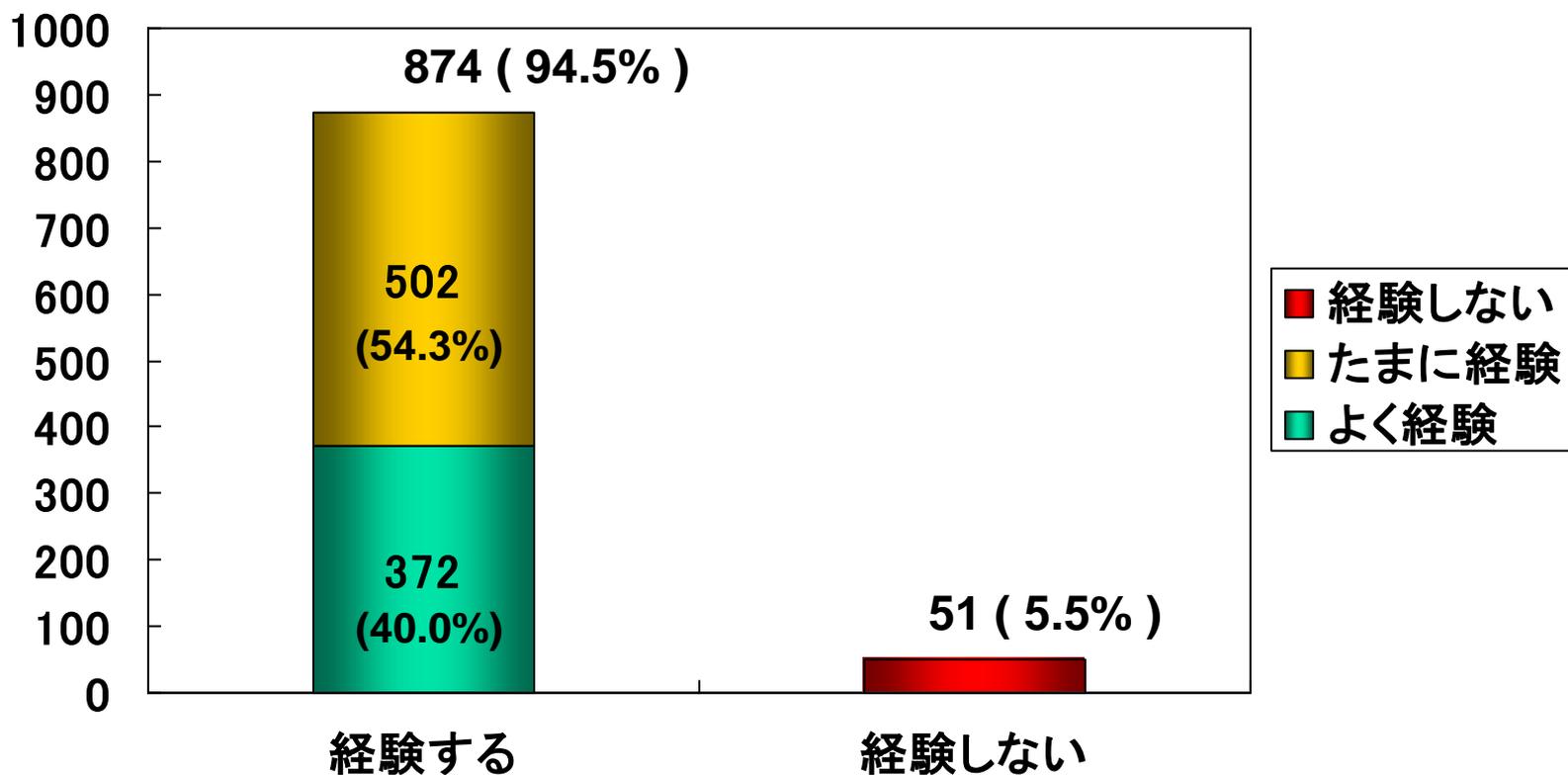


結果－1

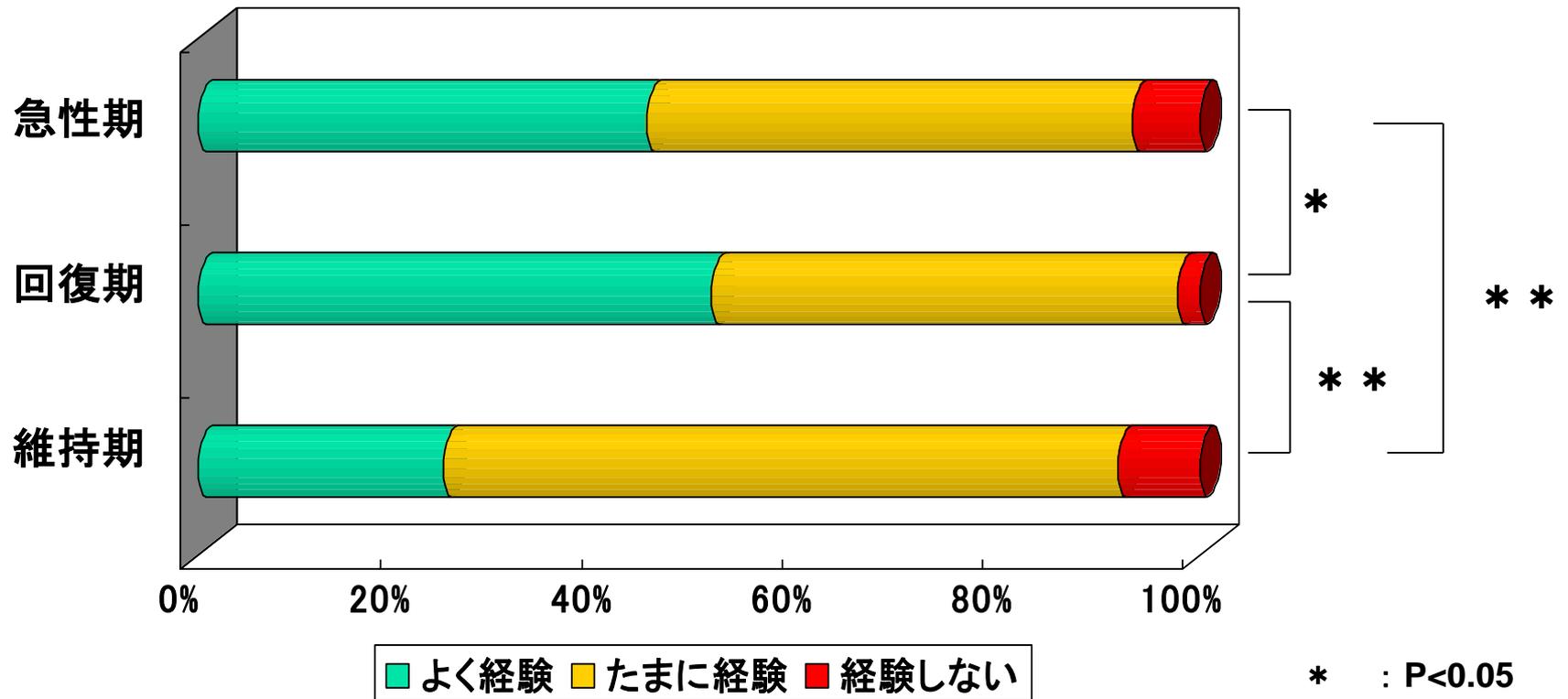
設問

“あなたは、脳卒中後遺症者から、「今後、私はリハビリを行えば、一人で歩けるようになりますか？」「この手は動くようになりますか？」等、機能予後に関する質問を受ける、あるいは過去に受けた経験がありますか？”

回答者全体では...

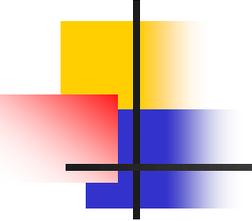


発症からの期間で分類すると...



* : P<0.05

** : P<0.005



さらに...

- ①よく経験する ... 2点
- ②たまに経験する ... 1点
- ③経験しない ... 0点として,

「得点換算」という統計処理を行う。

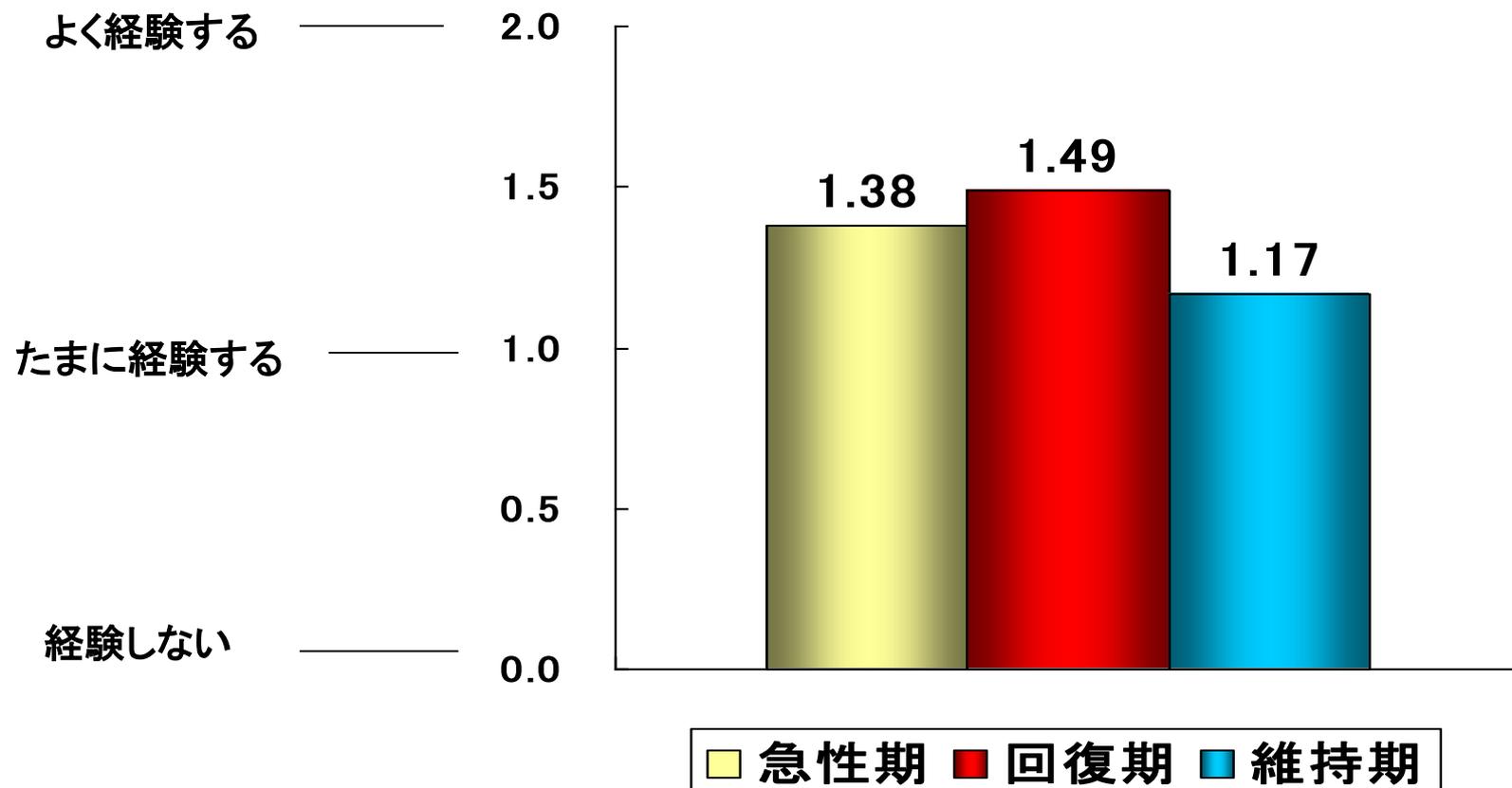
例：急性期に従事した経験のある回答者A～K の群では...

回答者	回答	得点
A	よく経験する	2
B	たまに経験する	1
C	よく経験する	2
D	経験しない	0
E	たまに経験する	1
F	たまに経験する	1
G	よく経験する	2
H	経験しない	0
I	経験しない	0
J	よく経験する	2
K	たまに経験する	1
平均		1.2

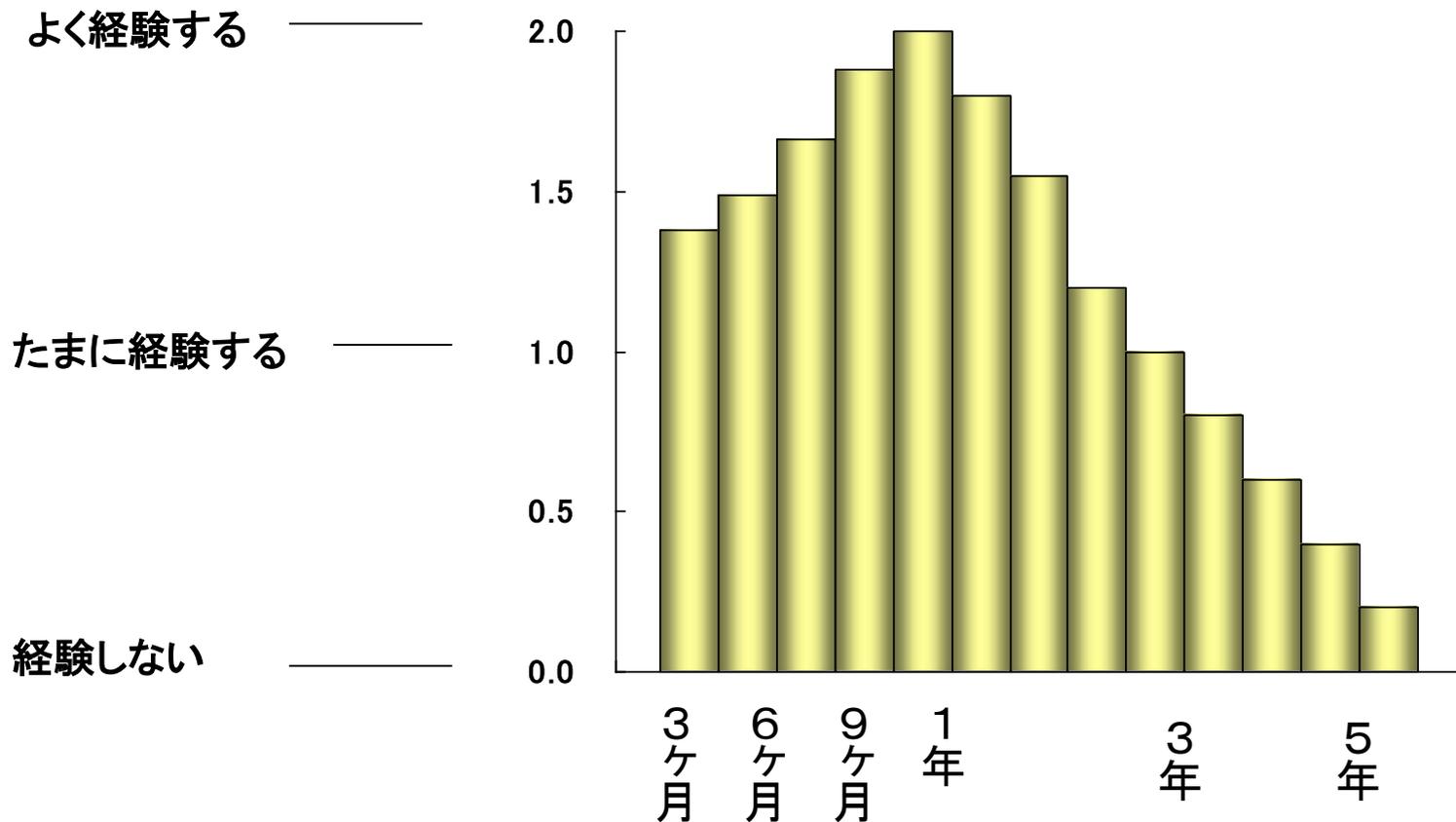
そのグループのすべての回答者が「よく経験する」と答えたら、そのグループの平均点は2.0点になり、全員が「経験しない」と答えたら、0点

このグループの回答の平均値は1.2点

発症からの期間別では...



より詳細な調査を行えば...



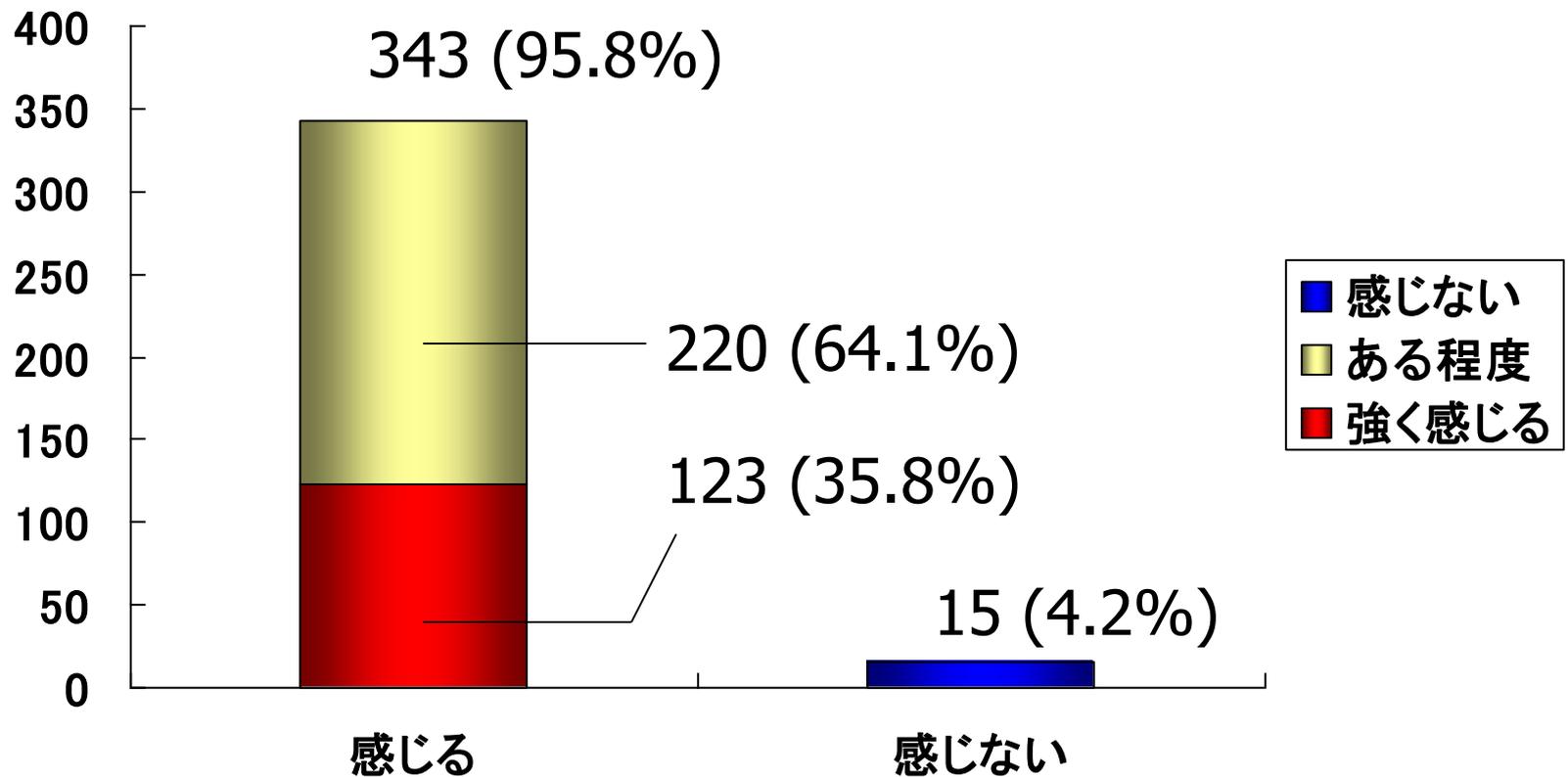


まとめー1

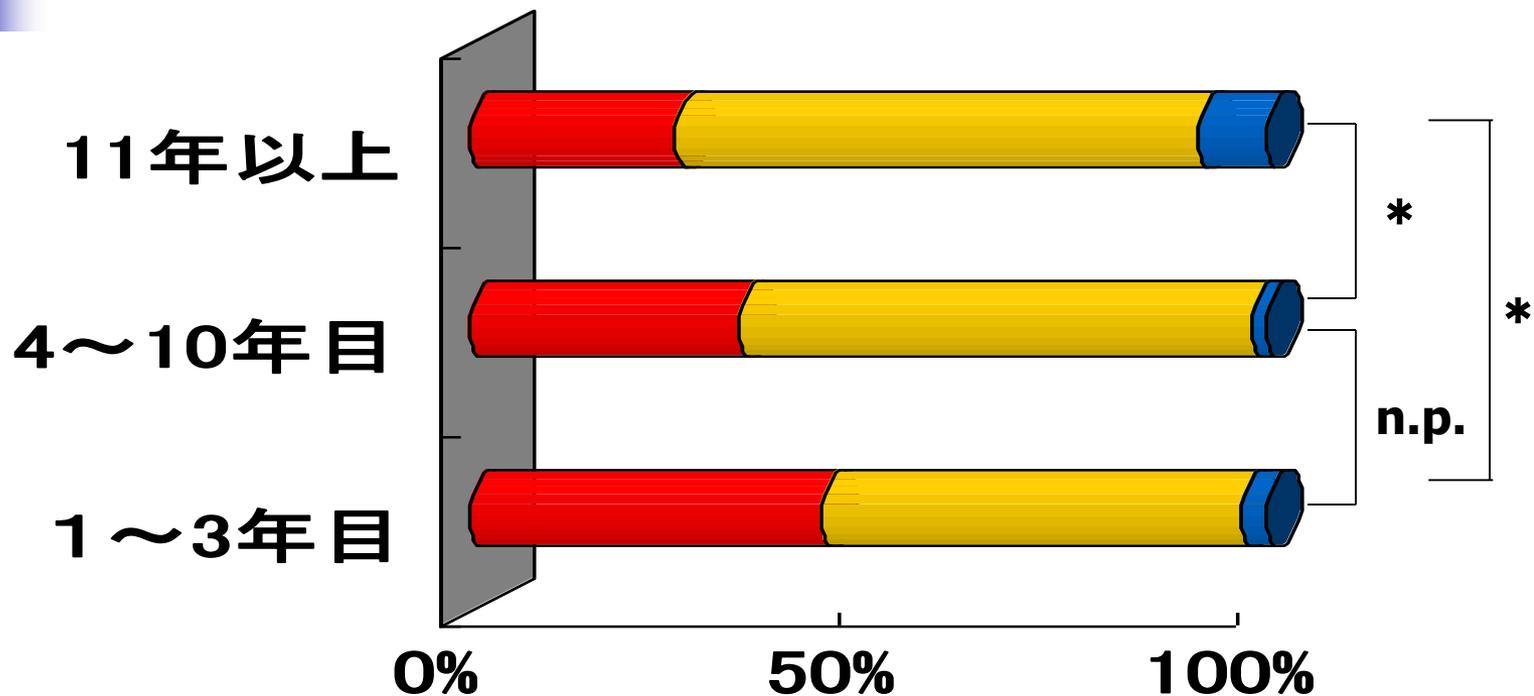
- 質問を受けた経験のないPTはごく小数である.
- 質問は, 回復期に勤務するPTが最も多く経験し, 維持期に勤務するPTが少ない傾向にある.

では次に...

設問 “質問を受けたとき、「どのように答えるべきか
悩む」等，困難を感じることはありませんか？”



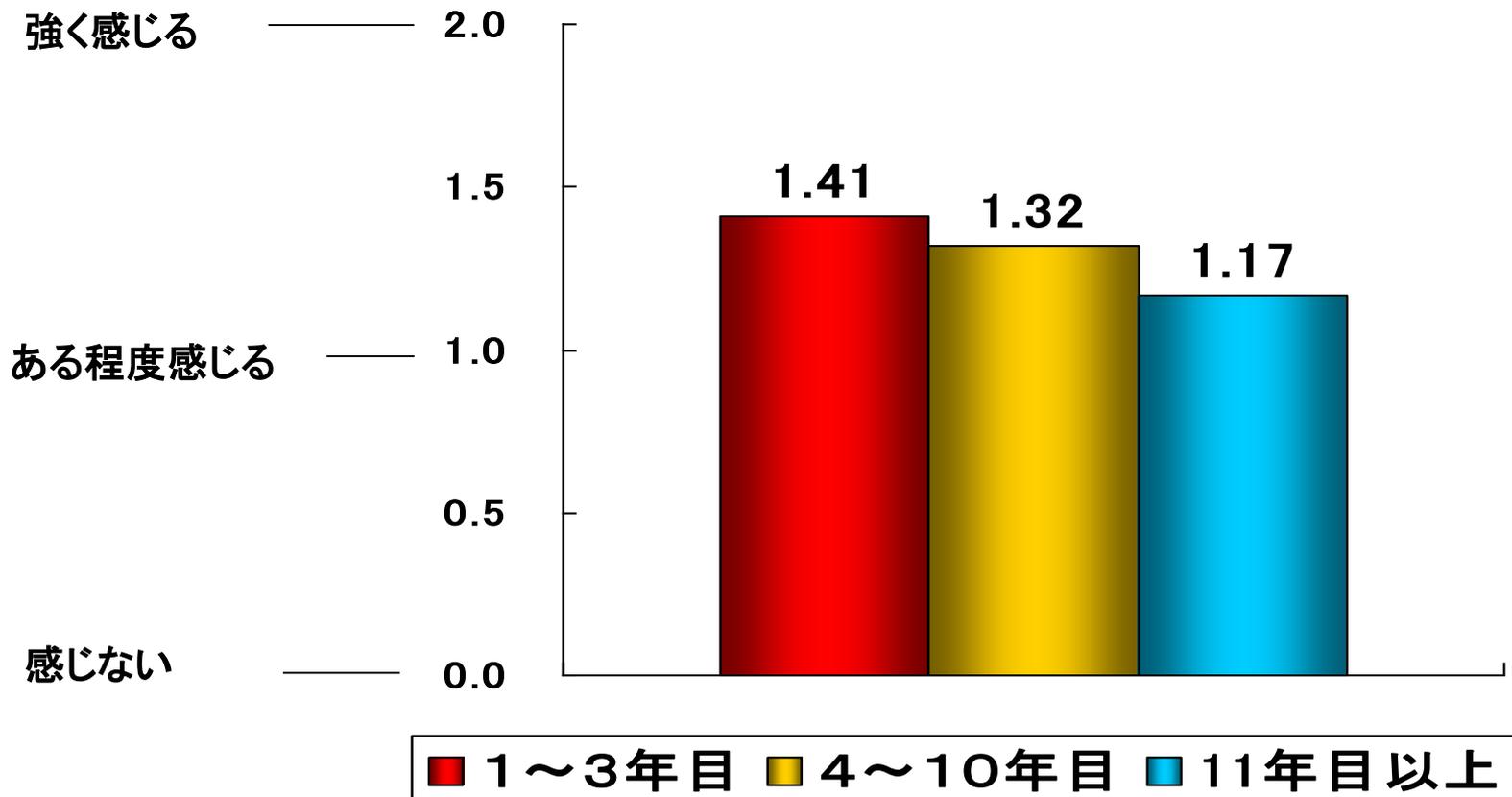
経験年数別に群間比較すると...



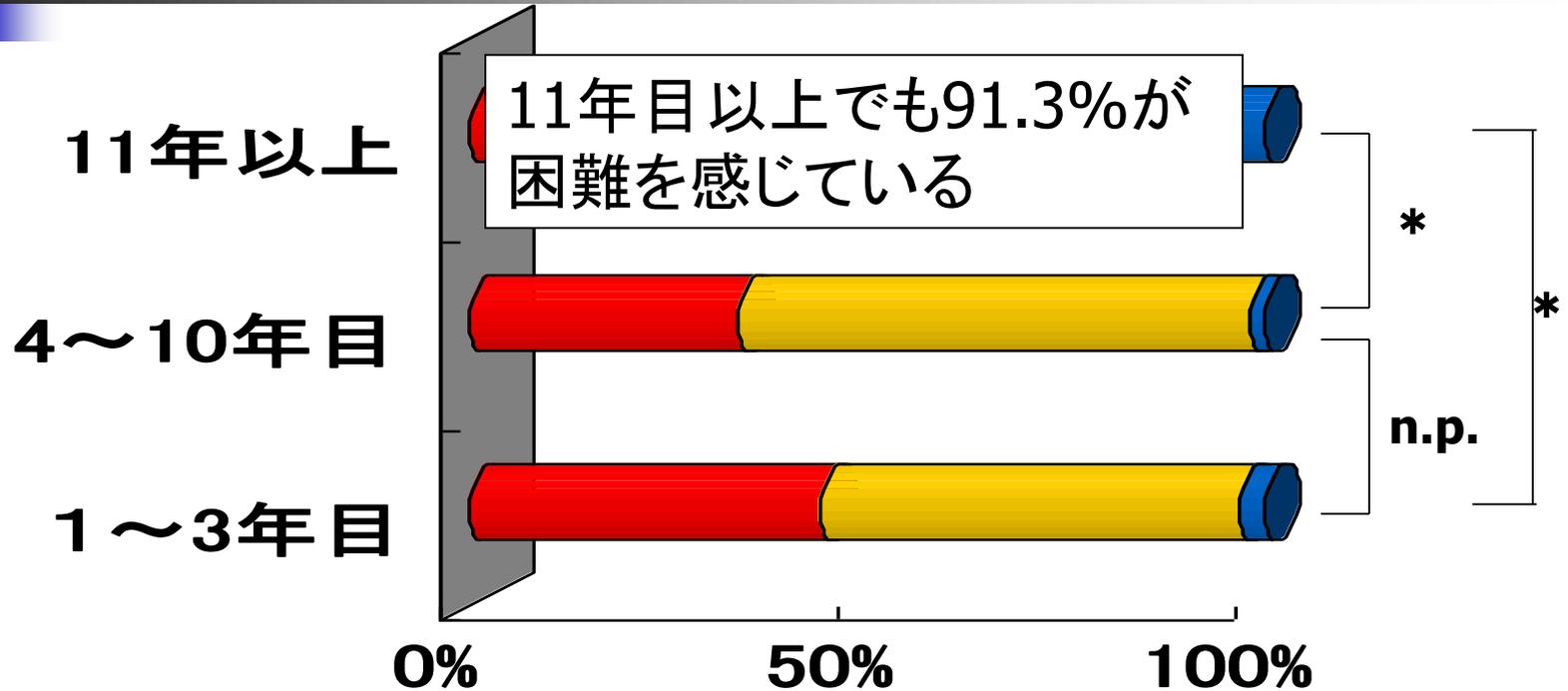
* : P < 0.05

■ 強く ■ ある程度 ■ 感じない

得点換算すると...



経験を重ねれば困難を感じなくなるかと言えは...



■ 強く ■ ある程度 ■ 感じない



困難を感じる理由(自由記載)

記載のあった項目	人数
説明後のモチベーションの低下, 心理的ショックの可能性	108
自分の説明内容と, 医師等からの説明との整合性	43
説明すべき内容, 程度	43
客観的予後予測と, 患者の期待のギャップ	42
重度の後遺障害が予想される場合	21
経験不足のために, 予後予測に自信が持てない	18
明確な予測, それ自体がそもそも困難	14



まとめー2

- 経験年数が少ないほど、説明に比較的強く困難を感じる傾向にあるが...
- 経験者にとっても困難を感じる難しいテーマである。
- 質問を受けた際、PTは様々な理由で困難を感じている。



訪問先において...

- 経験年数の少ないPTが,
- 主治医との情報交換も不十分なままに,
- 客観的には重度の後遺障害が予測されるにも関わらず、回復に強い期待を抱いているケースから,
 - 機能予後についての質問を受けたら

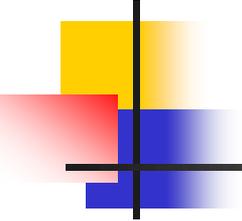
「どう答えればいいのか??？」



結語

「機能予後に関する質問と、それに対する説明」は、セラピストにとっても重要なテーマの一つであるにも関わらず...

どのように対処すべきかは、十分議論されていない。

- 
-
- 常日頃より、このテーマについて、職場内外でのディスカッションが必要。
 - 主治医との連携を強化する等、困難を軽減するための工夫も必要である。

ご静聴ありがとうございました。